

論文審査の結果の要旨

報告番号	博（生）甲第278号	氏名	賀南
学位審査委員	主査 連 清吉 副査 佐久間正 副査 谷村賢治 副査 勝俣 隆		
<p>論文審査の結果の要旨</p> <p>賀南氏は、2009年4月に長崎大学大学院生産科学研究科博士後期課程に進学し、現在に至っている。同氏は、生産科学研究科に進学以降、環境科学を専攻して所定の単位を修得するとともに、日中神話の比較に関する研究に従事し、その成果を2011年12月に主論文「天若日子神話の研究」として完成させ、参考論文として、学位論文の印刷公表論文3編（うち審査付き論文2編）、その他の論文1編を付して、博士（学術）の学位の申請をした。長崎大学大学院生産科学研究科教授会は、2011年12月21日の定例教授会において論文内容等を検討し、本論文を受理して差し支えないものと認め、上記の審査委員を選定した。委員は主査を中心に論文内容について慎重に審議し、公開論文発表会を実施するとともに、最終試験を行い、論文審査および最終試験の結果を2012年2月15日の生産科学研究科教授会に報告した。</p> <p>本論文は、古事記・日本書紀の「天若日子神話」の先行論を広範に収集し、よく咀嚼して、その問題点を適確に指摘・整理していること。特に、「ニムロッドの矢」によって説明されてきた「返し矢」の記述は、そもそも出典とされた旧約聖書に存在せず、紀元前三世紀以前に存在した可能性も乏しいことが明らかになってきた現在、その「ニムロッドの矢」による説明に代わるべき新たな解釈が求められていることを明確にした。従来、「天若日子神話」との比較が乏しかった中国の神話との比較を行い、日中の神話研究者の中で初めて、日本の「天若日子神話」と中国の「羿の神話」との類似性を「射日神話」という形で見出したこと。これは、賀南氏の最もオリジナルな部分であり、本論文の中の中枢を占める論点でもある。即ち、「天若日子神話」で、天若日子が射殺した樹上の雉は、太陽象徴の意味があることを指摘し、羿が太陽象徴たる扶桑樹上の鳥を射殺する行為に対応するとしたのが、氏の論点の重要な部分であり、その指摘の的確さ・新しさが高く評価できる。さらに、「天若日子神話」で、天若日子が射た矢が高天原の天照大神・高木神に届いたのは、太陽に向かって矢が射られた「射日神話」に当たるとしたのも、賀南氏の発明であって、今まで全く指摘されてこなかった点を指摘した点にパイオニアとしての独自性を見いだせる。また、高木神が「返</p>			

し矢」をして、天若日子がその矢に当たり横死するのは、従来の研究では、「ニムロッドの矢」型
の天罰として説明されてきた。しかし、賀南氏は、複数の太陽がその正統性を争う戦いとして位置
づけ、旧来の太陽神天照大神が新たな太陽神として登場した天若日子を、太陽神同士の戦いの末に
打ち負かして、その地位を守った物語として理解できることを論じた。これは、まさに、「天若日
子神話」に新たな光を当てたもので、その斬新さにおいて、高く評価できるものである。

以上のように本論文は、先ずは、古事記・日本書紀の本文の正確な読みに始まり、中国の対応す
る文献も確実に読解した上で、民俗学・考古学などの関連諸科学の成果も着実に利用して、総合的
な見地から論を立てるもので、視野の広さと、論旨の的確さは、手堅い研究でありながら、独自性
も有する優れた論として結実しており、太陽神話、とりわけ射日神話のあり方と要素を分析、太陽
神と雉の関係及びその民俗文化史的考察は、前人未到の考証と分析を披瀝ことは、日中神話研究に
多大の寄与をするものと評価できる。

学位審査委員会は、日中神話比較研究の分野において極めて有益な成果を得るとともに、日中神
話の民俗学研究の進歩発展に貢献するところが大きく、博士（学術）の学位に値するものとして
合格と判定した。